

文学研究と実験化学

南 豪

本稿執筆のきっかけは何ですか？

ある研究会に向かう電車の中で、たまたま隣に座ったお茶の水女子大学の三宅亮介先生に本件のご依頼をいただきました。このような偶然の機会は、対面開催の良さであると実感しております。ただ、私には趣味らしい趣味がありません。強いて申し上げるならば車の運転が好きで、10tトラックを運転できる大型免許を所有しています。トラック野郎よろしくデコトラでいつの日か通勤してみたいと思っておりますが、通行手形（プロフィール欄参照）をばく奪されてしまうと困りますので、まじめな話題として文学研究についてのお話をさせていただきます。

文学研究を知ったきっかけは何ですか？

私の妻です。妻は英文学者で、明治の世から代々続く生粋です（本学図書館所蔵の写真に義曾祖父と新渡戸稲造が並んで写っている写真があって驚いたことがあります……）。自身は文学の研究をどのように行うのかについて知識は全くありませんでした。しかし、実際に見てみると、異なる点があるものの、そのアプローチや考え方は自身の研究にも通じるものが数多くあることに気が付きました。今回はそれについてご紹介したいと思います。

最初に実験化学と形式的に異なる点をいくつか挙げますと（あくまでも妻の事例でありますため、ほかの先生方と異なる点があるかもしれませんがご容赦願います）、まずお金をかけずにいつでもどこでも研究ができます。書物やパソコンに多少お金が必要ですが、実験化学の比ではありませんし、報告書も必要ありません（うらやましい……）。また、学会発表ではパワーポイントを使用しないで朗読します（コロナ禍後は使うこともあるようですが）。さらに論文はすべて単著です。学生が執筆しても指導教員名は入りません。その上インパクトファクター（IF）を気にしません。もちろん学術誌の採択難易度は存在するようですが、IFに翻弄されることはないようです。

続いて研究の内容とアプローチについてですが、文学研究では、ある作家とその文学作品について考察を行います。研究会も作家ごとに存在し、例えば妻の場合、ヴィクトリア朝時代（1837～1901年）の作家であるトマス・ハーディについて研究をしており、日本ハーディ協会と呼ばれる学会にて活動しています。なぜ作家ごとに研究会が存在するのか、当初は不思議な印象を受けましたが、それはそ



妻の研究アイテム

の作家が作り出す文学作品が1つの専門分野を作り出すほどの深い考察ができるからだということがわかりました。同じ文学作品だとしても研究者によって見方が全く異なり、作者の生い立ち、人生経験、社会情勢・構造といった複合的要因を研究者自身の経験とアイデアに基づく独自の考察を論理的に行い、文学作品の新たな側面を浮き彫りにします。例えば、先のハーディ作品は生氣論について反論したダーウィンの進化論の影響を色濃く受けていると聞きました。19世紀はヴェーラー合成が報告され、生氣論の否定が文学にも影響を与えているというのはとても興味深い点でした。妻の研究の話を聞いておると、文学研究も実験化学もさほど変わらないと感じました。私は超分子化学が専門ですが、非共有結合という自然が生み出した作品に対して、いろいろな研究者が独自の視点で様々な論文を出しているという点では同じだと思ったからです。

文学研究は実験化学と関係がありますか？

学際研究の重要性が言われて久しいですが、文学研究は我々にとってはとてつもなく距離のある異分野で、混じりあうことのない関係であるように思われます。しかし、蓋を開けてみますと、論理的思考、新規性、オリジナリティ、また時には科学的背景に踏み込んで考察するその研究方法はあまり我々と変わらないことがわかりました。アーサー・コナン・ドイルの作品を化学的視点で考察している書籍も刊行されていることを勘案しますと、化学者が文学の研究会で発表できれば新しい世界が拓けるかもしれないと考えています。いつの日か、一度は発表してみたいと思っており（リジェクトされるかもしれませんが……）、そういう意味では私の新しい趣味になるのかもしれない。



みなみ・つよし
東京大学生産技術研究所 准教授
【経歴】埼玉生まれ、埼玉育ち。2006年埼玉大学工学部卒業。08年同大学大学院博士前期課程修了、通行手形を得て11年首都大学東京大学院博士後期課程修了、博士（工学）。ポーリンググリーン大学博士研究員を経て、14年山形大学助教。通行手形を再取得して16年東京大学講師・東京大学卓越研究員、19年より現職。